

インクルーシブスポーツとしてのボウリングの可能性

佐藤 紀子

The potential of bowling as an inclusive sport

Noriko Sato

1. はじめに

近年、「ダイバーシティ&インクルージョン」という言葉を耳にすることが増えている。ダイバーシティ&インクルージョンとは、「ダイバーシティ（多様性）を尊重し、異なる価値観や能力をインクルージョンする（抱合する・活かし合う）ことで、イノベーションや新たな価値創造につなげ、一人ひとりが活躍でき、居場所を見つけられる社会をめざす取り組み」（日本財団, 2021）、「年齢や性別、国籍、学歴、特性、趣味嗜好、宗教などにとらわれない多種多様な人材が、お互いに認め合い、自らの能力を最大限発揮し活躍できること」（厚生労働省, 2022）を意味している。

スポーツの世界でも、「誰もがともに楽しめるインクルーシブスポーツ」（スポーツ庁, 2024）という考え方が広がりつつある。本稿では、「インクルーシブスポーツ」の定義を確認し、ボウリングにおける多様な人々のニーズに対する配慮を説明する。その後、一般社団法人全日本視覚障害者ボウリング協会（以下BBCJ）の「インクルーシブチーム戦」を紹介し、「インクルーシブスポーツ」としてのボウリングの可能性についてみていく。

2. インクルーシブスポーツとは

「インクルーシブスポーツ」とはどのようなスポーツを指すのだろうか。「インクルーシブ・スポーツ・フェスタ」を開催している公益財団法人横浜市スポーツ協会（2024）は、インクルーシブスポーツを「障害の有無や年齢、性別、国籍等を問わず誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会である共生社会の実現に向けた取組を推進する、各人の適正にあったスポーツ活動のこと」と説明している。また、細田ら（2014）は「障害のある人とない人が共にするというのではなく、『障害があるなしにかかわらずおのおののニーズに配慮したスポーツ』」と定義している。「インクルーシブスポーツ」とは、全ての人を包摂したスポーツであり、一人一人のニーズに合わせたスポーツ（佐藤, 2018）だといえる。

インクルーシブスポーツと似た考え方に「ユニバーサルスポーツ」がある。川名（2012）は、「ユニバーサルスポーツとは、ノーマライゼーションの考え方を基にしており、障害の有無に関係なく、一緒にできるスポーツをさし、体力、体格の違いで有利不利がおこりにくいよう配慮されているのが特徴である」としている。兒玉ら（2023）は、用具やルールを工夫して、障害

の有無や年齢、性別等に関係なく楽しめるスポーツだと述べている。また、藤田（2023）はユニバーサルスポーツが持ち合わせるべき2つの要件を挙げている。一つ目は、そのスポーツやレクリエーションの場に集まった人たち、誰でもが一緒に参加できるスポーツであること。ここでいう「誰でも」というのは、各種障害のある人・ない人、幼児から高齢者まで、全ての人が参加できるということではなく、その場に集まった人たちがルールや用具を柔軟に変更し、参加できるということを意味している。二つ目は、勝敗が決まるスポーツの場合、参加した全ての人やチームが勝者になる可能性を持つことである。

ここで、ユニバーサルスポーツとインクルーシブスポーツの相違点を整理する。ユニバーサルスポーツでは、その場にいる人々が年齢や性別、障害の有無、体力や体格の違いによって有利不利が生まれないように工夫された一つの用具やルールを用い、皆が公平に参加できることを目指している。一方で、インクルーシブスポーツは、その人の特性によるニーズに配慮し、能力を発揮できるようルールや用具を工夫したうえで、共にスポーツを楽しむこと、一人一人のニーズに合わせて共に参加することを目指している。

「インクルーシブスポーツ」という考え方には、まだ定まった定義はない状態である（秋田，2022；佐藤，2018）が、本稿では、参加者の特性、ニーズに合わせて、それぞれが自身の能力を最大限に発揮できるようルールや用具を工夫し、多様な人々が共に参加できるスポーツをインクルーシブスポーツとして、論を進める。

3. インクルーシブスポーツとしてのボウリング

ボウリングは国民スポーツ大会の実施競技であり、全日本選手権大会や世界選手権大会も開催されるれっきとした競技スポーツである。し

かしながら、一般的にはボウリングは、レクリエーションやレジャーとしてとらえられることが多いように思われる。大学生がボウリングをどのように見ているのかを調査した村松（2017）は、「現代の若者にとっては真剣に勝敗を競うスポーツ、すなわち“競技スポーツ”としての認識が希薄であった。しかし、多様なスポーツが生まれている現代にあっても、ボウリングは遊び、友達とのコミュニケーションを目的とする手軽な“レクリエーション・スポーツ”として若者に受け入れられているのである」と述べている。

社会学の観点からボウリングブームやその後のボウリングを取り巻く状況を論じた笹生（2017）は、ボウリングは、競技そのものを楽しむスポーツという顔と飲食や仲間との交流、ゲーム機での遊びも併せて楽しむレジャーとしての顔を持つとしている。つまり、ボウリングはレクリエーションやレジャーとしても、競技としても取り組めるスポーツであり、その楽しみ方は多様であるといえる。

ここでは、競技スポーツとしてのボウリングが、投球する人の特性やニーズに合わせて、その人の能力を発揮できるようルール、用具を工夫することが可能であること、多様な人々がそれぞれに合ったルール、用具を用いて共に楽しめることを説明していく。

3.1 年齢

ボウリングは子どもから高齢者まで、多様な年齢層が楽しめるスポーツである。

日本のボウリング競技を統括し、代表する団体である公益財団法人 JAPAN BOWLING（以下 JB）^{註1)} は毎年「全日本年齢別ボウリング選手権大会」を開催している。「ジュニアからシニアに至るまで、どの世代でも全国トップを目指せるボウリング」というコンセプトで、「同じ世代同士で実力を試したい、という選手側の

ニーズに応えた人気のある大会」(JB, 2024a)となっている。年代別で個人戦がおこなわれ、19歳以下、20歳代、30歳代、40歳代、50歳代、60歳代、70歳以上の部、7部門で優勝者を決定している。70歳以上の部においては、75歳以上の選手に対して5歳年齢が上がるごとに、1ゲームにつき5点のハンディキャップが加算される。また、JBは2010年から「全日本小学生ボウリング競技大会」を開催している。この大会では小学4年生、5年生、6年生の部門が設けられ、学年別に競技がおこなわれる(JB, 2024b)。

これらの大会はJBのボウリング競技規則^{注2)}が用いられ、どの年代も基本的に共通のルールで競技がおこなわれている。使用するボールについては、重量(16.00ポンド:7.25kg以下)や大きさ(円周は27.002インチ:68.58cm以下、26.704インチ:67.83cm以上)の規定が設けられている。レーンについても、その長さはファールラインから1番ピンスポットの中心までは60フィート:18.288m、幅は41インチ:1.0414m^{注3)}と定められており、例えば、小学生は小さなボールや短いレーンを使用するといった用具・施設の変更はおこなわれない。

ボウリングは高齢になっても楽しむことができる。ボウリング場経営者団体である公益社団法人日本ボウリング場協会では、1996年から毎年、趣味として月に1回以上ボウリングを楽しんでいる高齢者を大相撲の番付に見立て「長寿ボウラー」として公表している。令和6年度の番付によると女性、男性ともに最高齢は100歳である(公益社団法人日本ボウリング場協会, 2024)。

3.2 性別

ボウリングは性別に関係なく楽しめるスポーツである。

前述の「全日本小学生ボウリング競技大会」

は男女別に競技がおこなわれている(JB, 2024b)が、「全日本年齢別ボウリング選手権大会」では男女混合で競技がおこなわれ、女性選手には1ゲームにつき15点のハンディキャップが与えられている(JB, 2024a)。適正なハンディキャップを設定することで、性別に関係なく共に競い合うことが可能となる。

3.3 障害

ボウリングは障害のある人も取り組むことができるスポーツである。

「きこえない・きこえにくい人のためのオリンピック」(一般社団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会, 2022)であるデフリンピックにおいて、ボウリングは1997年のコペンハーゲン大会から正式種目として採用され、2025年東京で開催される東京2025デフリンピックでも競技がおこなわれる(International Committee of Sports for the Deaf, 2024)。

一方、2026年に名古屋で開催されるアジアパラ競技大会では、ボウリング競技はおこなわれないが、2010年に開催された広州2010アジアパラ競技大会から、2014年インチョン大会、2018年インドネシア大会と3大会にわたりボウリングは正式競技に採用され、運動機能障害、視覚障害、知的障害区分において競技がおこなわれた。

2025年1月には、ボウリング競技の国際統括組織であるInternational Bowling Federation(以下IBF)が、パラボウリング世界選手権大会を開催することになっている。この大会では、視覚障害(障害の程度別3クラス)、運動機能障害(車いす利用、片上肢欠損、片下肢欠損)、知的障害の7つの障害区分で競技がおこなわれる(IBF, 2024)。

ここでは、それぞれの障害の特性によるルールや用具の工夫についてみていく。

(1) 聴覚障害

聴覚障害のある人がボウリングをおこなう際、特別なルールや用具の工夫をおこなう必要がなく、健聴者と同じルール・用具でおこなわれる。「全日本デフボウリング選手権大会」においては、JBボウリング競技規則に準じて競技がおこなわれている。練習ボールの開始・終了などの合図が光の点灯やモニターなどによって視覚的におこなわれるといった競技運営上の工夫がなされるのみである（一般社団法人日本デフボウリング協会, 2024）。

(2) 視覚障害

視覚障害のある選手については、International Blind Sports Federation（以下IBSA）のクラス区分を用いて、障害の程度によりB1、B2、B3の3つのクラスに分けて競技が実施される。IBSAの競技ルールでは、B1およびB2クラス選手については、投球・助走確認のためのガイドレール（図1）の使用が認められている。B1クラスの選手はアイマスクやアイシェードの使用が義務付けられる。また、全てのクラスの選手は必要に応じて残ピンやボールの軌道等の視覚的情報の説明を受けて競技をおこなう。

(3) 運動機能障害

運動機能障害については、IBFの世界選手権大会では、片下肢欠損、片上肢欠損、車いす利



図1 ガイドレール

用の3つの区分で競技がおこなわれる。片下肢・片上肢欠損の選手は義肢を装着することは認められているが、電動式のものの利用は認められていない。また、車いす利用の選手も、競技中の電動車いすの利用は認められていない。車いすの安定のためにボウリングボールを2つ搭載することのみが認められる（IBF, 2024）。

片下肢・片上肢欠損選手は通常のルール・用具で競技がおこなわれる。車いすの選手は、車いすの使用以外は通常のルール・用具で競技がおこなわれる。

(4) 知的障害

知的障害のある選手の場合は、競技における特別なルールや用具の工夫は必要がない。

ここまで、それぞれの障害について、必要なルールや用具の工夫をみてきた。ボウリング競技は、障害の特性に応じて、アプローチ上での使用用具が認められる以外は、障害のない人と同じルールで競技がおこなわれている。

4. 視覚に障害のある人とない人の「インクルーシブチーム戦」

BBCJでは、2022年に開催された第19回全日本視覚障害者ボウリング選手権大会より健常者のボウリング競技団体であるJBより推薦された健常者ボウラーと視覚障害者ボウラーが一つのチームを組み競技をおこなう「インクルーシブチーム戦」を選手権大会の2日目に開催している。この「インクルーシブチーム戦」は同協会が命名した競技で、「わが国における視覚障害者のボウリング競技普及と視覚障害者ボウリング関係者の交流、障害者を取りまくスポーツ環境の充実、および多様性を認める共生社会実現の促進を目的とする」（BBCJ, 2024a）という大会の目的を実践的に示す競技である。

まずは全日本選手権大会の1日目に開催される個人戦について説明する。個人戦は、参加選手数がまだ少ないため、男女混合で実施してい

る。その際、女子には各ゲーム10点のハンディキャップが与えられている。また、IBSAのクラス分類を採用し、3つのクラスに分かれて競技を実施している。ただし、本大会ではB3のカテゴリーに入らない視覚障害者についても、特別にB3クラスでの競技を認めている(BBCJ, 2024b)。

インクルーシブチーム戦はベーカー方式を採用している。ベーカー方式とは、チーム戦としておこなわれる方法で、チームメンバーはあらかじめ自分たちで決めた投球順序に従って、1つのレーンで1フレームずつ交代で投球し10フレームを終了するという競技方式である。

本大会でのチーム編成は次のとおりである。各チームには、原則3名の視覚障害ボウラーと1名の視覚に障害のないボウラーが割り当てられる。視覚に障害のあるボウラーは同大会の個人戦に参加した選手である。視覚に障害のないボウラーは、JBより推薦された全日本ナショナルチームまたは全日本ユースナショナルチームの選手である。

視覚に障害のあるボウラーについては、1日目の個人戦6ゲームの結果を、クラスや性別の枠組みを外し、得点の高い方から順位付けする。例年30名程度の視覚障害のあるボウラーが参加している。視覚障害のある参加選手を30名とすると、第1位から30位までの順位が付けられる。この順位をもとに、1位・11位・21位の選手をAチーム、2位・12位・22位の選手をBチーム、…、10位・20位・30位をJチームと割り当ててチームを編成する。

視覚に障害のないボウラーについては、1日目に3ゲームの予選をおこない、その結果をもとに、第1位の選手をJチームに、2位をIチームに、…、10位の選手をAチームに割り当て、視覚障害のあるボウラー3名と視覚障害のないボウラー1名の合計4名で競技力のバランスを取るようにしている。欠場者が出た場合

など、視覚障害のある選手数が、3の倍数にならない場合、JやIのチームは視覚障害のあるボウラー2名と視覚障害のないボウラー1名、3名のチーム編成となる。

インクルーシブチーム戦のルールは、通常のベーカー方式と同じであるが、投球順について条件を設けている。視覚に障害のないボウラーはナショナルチームメンバーであり、ストライクを出す確率が高いため、最大3回投球できる第10フレームの担当を認めていない。10フレームには必ず視覚に障害のあるボウラーが投球することと決めている。この場合、4人チームでは、第1、第5、第9フレームに視覚障害のないボウラーが投球する作戦をとるチームが多くなる。3人チームでは、第3、第6、第9フレームに視覚障害のないボウラーが投球するチームが多い。これは視覚障害のないボウラーの投球フレームを増やすとともに、ゲームメイク上、重要となる9フレーム目を担当させることで、その力を最も有効に活用するためである。

通常のベーカー方式では、各チームが一つのレーンで投球するが、本大会では一つのチームに1ボックス、2レーンが割り当てられる。奇数のレーンでは、ガイドレールを使用する視覚障害のあるボウラーが投球し、それ以外のボウラーは偶数レーンで投球する。このようにすることで、ガイドレールを使用する選手も、ガイドレールを使用しない選手も、それぞれが最大限の実力を発揮することが可能になる。

インクルーシブチーム戦では、視覚障害のあるボウラーが、ナショナルチームのボウラーからレーンコンディションに合わせて、どこを狙えば良いかといったアドバイスを受けて投球をおこなうことが可能である。一方、視覚障害のないボウラーも、仲間からの応援を受けながら、チームのために最大限のパフォーマンスを発揮しようと努める。

ここで、インクルーシブチーム戦に参加した

JB 推薦選手の声を紹介する。

・ボウリングはどんな人でも平等に戦えるいい競技だなと改めて思いました。

・障害があろうがなかろうがボウリングを楽しんでできるということが勉強になりました。

・今回参加したことで、視覚障害には種類があるということや、それに応じたハイタッチのしかた、声のかけ方を学ぶことができました。

・ボウリングの持っている可能性の大きさに驚くとともにスポーツの素晴らしさを実感しました。障害のある選手も競技できるボウリングはやはり素晴らしいスポーツだなと思いました。またチーム戦においては、なるべく具体的に分かりやすく伝えようと意識しました。

JB 推薦選手の声からは、ボウリング競技を通じて、視覚障害についての学びや気づきを得ていることがうかがえる。次は視覚障害のあるボウラーの感想を紹介する。

・今回のチーム戦は新しい取り組みで、若い実力のあるナショナルチームのメンバーと共に投球するワクワク感のあるゲームとなりました。一投一投が個人戦とは違う緊張感があり、勝利するとチーム全員で喜びあえる大会になりました。全員で助け合い最後は優勝することができ、チームそしてサポートスタッフの方々に感謝です。

・今回、ナショナルチームの M 選手とチームを組ませて頂きました。M 選手の投球を間近で拝見し、またボウリングのお話が出来て大変参考になりました。またナショナルチームメンバーとのチーム戦ということで注目度も高かった様に思いました。次回もこのようなチーム戦が出来れば良いと思いました。また、今まで組んだことの無い選手との交流も出来て良かったと思います。

・緊張もしましたが、とても楽しかったです。トップボウラーの選手と一緒にやることで、ボール選びだったり、ラインのとりかただった

りを教えてもらえるので、とても勉強になりました。

視覚障害のあるボウラーの感想には、JB 推薦選手からの刺激について述べているものが多かった。

2024年9月に開催された第21回全日本視覚障害者ボウリング選手権大会に参加した視覚障害ボウラーの最高年齢は81歳、平均年齢は、56.0歳であるのに対し、障害のないボウラーは17.4歳であった。年齢という点でもまさにインクルーシブチーム戦であったといえる。

BBCJでは、このような取り組みを通じて、年齢、性別、障害の有無に関わらず、誰もが自身の能力を最大限に発揮し、共に参加できるスポーツとしてのボウリングを実践的に示し、ダイバーシティ&インクルージョンの実現に寄与しようとしている。

5. ボウリングの多様な楽しみ方

ここまで競技としてのボウリングを中心にみてきたが、ボウリングはレクリエーション、レジャーとしても楽しめるスポーツである。特別な用具がなくても、ボウリング場でシューズやボール（ハウスボール）を利用することができ、気軽にプレイすることができる。

ボウリング場には4ポンドから16ポンドのハウスボールが用意されており、自身の体力によってボールを選ぶことが可能である。4ポンド：1.81kgのボールを投球することが困難な幼児用にボウリングランプ、ボウリングスロープ（図2）が設置されているボウリング場も多い。幼児や初心者がボウリングをする際にガター（レーン横の溝）にばかりボールが落ちていたのでは、楽しみも半減してしまう。そのため、ガターをなくすバンパー（図3）が使用できるレーンもある。最近では、レーンの中央まで歩いていくことができるよう絨毯を敷き、レーンを短く使用できるような工夫をおこなっている



図2 ボウリングランプ、
ボウリングスロープ



図3 ガター防止バンパー



図4 レーンを短くする工夫

ボウリング場もある。その際、ボールをカートに載せて運べるような工夫もなされている（図4）。

ボウリングは多様な楽しみ方の中で、その人の能力を発揮できる様々な工夫ができるスポーツである。

6. おわりに

本稿ではインクルーシブスポーツとしてのボウリングの可能性をみてきた。秋田（2022）は、インクルーシブスポーツとは「ふとスポーツをしてみたいと思った時に、普通に当たり前にスポーツができる環境を整えること」だとしている。

図5は2008年から2023年までの全国のボウリング場数の推移である。2008年には988あったボウリング場が、2016年には784、2023年には659とその数を減らしている。

ボウリングというスポーツ自体はまさにインクルーシブスポーツであるといえる。しかしながら、ふとボウリングをしてみたいと思った時に、当たり前にできる状況を確認するために

は、ボウリング場数の維持が必要である。我が国のボウリング場はレーン数の多い大規模なものが多い。地域のスポーツ施設に2ボックス、4レーン設置されていたり、駅ナカに8レーンのボウリング場があったりといった施設の多様性があっても良いのかもしれない。

年齢、性別、障害の有無にかかわらず、誰もが能力を発揮し、楽しめるボウリングをさらに普及させるためには、身近な場所にボウリングができる施設が増えることが望まれる。

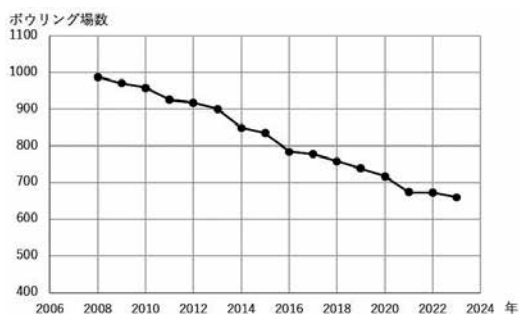


図5 ボウリング場数の推移

*公益社団法人日本ボウリング場協会調査データより筆者作成（公益社団法人日本ボウリング場協会，2024）

【文献】

- 秋田浩平 (2022) シンポジウム I パラリンピック・レガシー 2. インクルーシブスポーツ推進の立場から. 第44回総合リハビリテーション研究大会 リハビリテーション・スポーツの果たす役割報告書, <https://www.dinf.ne.jp/d/6/277.html>
- 一般社団法人全日本視覚障害者ボウリング協会 (2024a) 第21回全日本視覚障害者ボウリング選手権大会開催要項. <https://www.bbcj.org/taikai.html>
- 一般社団法人全日本視覚障害者ボウリング協会 (2024b) 第21回全日本視覚障害者ボウリング選手権大会競技規則. <https://www.bbcj.org/taikai.html>
- 一般社団法人全日本ろうあ連盟スポーツ委員会 (2024) デフリンピックってなに?. デフリンピック Deaflympics ろう者のオリンピック, <https://www.jfd.or.jp/sc/deaflympics/about/> (2024.8.27参照)
- 一般社団法人日本デフボウリング協会 (2024) 第3回全日本デフボウリング選手権大会2024開催要項. <https://toriaez-hp.jp/assets/1-B350000008/uploader/sjtoxGk1wY.pdf>
- 川名正昭 (2012) 「福祉考房」5年間の活動記録 - 社会福祉士養成課程における実践学習の試み -. 田園調布学園大学紀要, 7: 1-33.
- 公益財団法人 JAPAN BOWLING (2024a) JB 会長杯 全日本年齢別ボウリング選手権大会. 主催大会詳細, https://www.japan-bowling.or.jp/syusai_syousai/nenreibetsu/
- 公益財団法人 JAPAN BOWLING (2024b) 小学生特別指導会兼 全日本小学生ボウリング競技大会. 主催大会詳細, https://www.japan-bowling.or.jp/syusai_syousai/elementary/
- 公益財団法人横浜市スポーツ協会 (2024) インクルーシブスポーツ推進事業. 事業紹介, <https://www3.yspc.or.jp/projects/004.html> (2024.8.27参照)
- 公益社団法人日本ボウリング場協会 (2024) 令和6年度全国長寿ボウラー番付【広報資料】. https://bowling.or.jp/pdf/senior-ranking/2024_kouhou.pdf
- 厚生労働省 (2022) ダイバーシティ&インクルージョンの時代に 治療と仕事の両立で自分らしく働く. 広報誌『厚生労働』, https://www.mhlw.go.jp/stf/houdou_kouhou/kouhou_shuppan/magazine/202209_00002.html
- 児玉友・藤田紀昭・金山千広 (2023) ユニバーサルスポーツの普及促進に関する研究 - 名古屋市におけるユニバーサルスポーツの導入を事例として -. 日本福祉大学スポーツ科学論集, 6: 73-79.
- 笹生心太 (2017) ボウリングの社会学<スポーツ>と<レジャー>の狭間で. 青弓社
- 佐藤紀子 (2018) わが国における「アダプテッド・スポーツ」の定義と障害者スポーツをめぐる言葉. 日本大学歯学部紀要, 46: 1-16.
- スポーツ庁 (2024) 誰もが共に楽しめるインクルーシブスポーツの場を創出. スポーツ庁 Web 広報マガジン DEPORTARE, <https://sports.go.jp/tag/disability/post-132.html>
- 日本財団 (2021) 2021年度版「ダイバーシティ&インクルージョンに関する意識調査」を実施. <https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2021/20211130-64961.html>
- 藤田紀昭 (2023) ユニバーサルスポーツをつくる. ユニバーサルスポーツをはじめよう, 名古屋市スポーツ市民局スポーツ推進部スポーツ振興課スポーツ振興担当, <https://www.city.nagoya.jp/sportsshimin/>

cmsfiles/contents/0000162/162179/
jireisyu.pdf

細田満和子・渋谷聡・吉野ゆりえ（2014）インクルーシブスポーツの課題と可能性－共生社会におけるスポーツについて－. 星槎大学紀要 共生科学研究, 10:136-144.

村松茂（2017）スポーツ考－現代の若者とボウリング－. 横浜市立大学論叢人文科学系列, 69（1）:171-181.

International Committee of Sports for the Deaf (2024) DEAFLYMPICS Bowling. SPORT, <https://www.deaflympics.com/sports/BW> (2024.8.27参照)

International Bowling Federation (2024) Supplementary Information about Classifications. IBF Para Bowling World Championships, <https://bowling.sport/>

wp-content/uploads/2024/08/Annex-1-Supplement-Information-on-Classifications.pdf

【注】

- 1) 2024年4月1日より「公益財団法人全日本ボウリング協会」の名称が「公益財団法人 JAPAN BOWLING」に変更された。
- 2) 国内のボウリング関連9団体によって設立された日本ボウリング機構（JBO）は、ボウリングの日本国内統一ルールとして「日本ボウリング機構ボウリングルール」、通称JBOルールを制定し、2024年9月24日より施行された。今後はJBOルールが使用されることとなる。
- 3) それぞれ、 $\pm 1/2$ インチの許容範囲が設定されている。